

観世新九郎家文庫目録(中)

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

152

(終了ページ / End Page)

169

(発行年 / Year)

1977-03-20

観世新九郎家文庫目録 (中)

八 実技関係手付類 (冊子本その五)

1 江戸中期筆「秘」印小鼓伝書 上中下三冊

仮綴(袋綴風)の美濃本。共表紙。奥書が無いが、現れる人名などから宝永(正徳頃)の書写と見られ、多分新九郎恭豊の筆であろう。習事・秘曲の類の小鼓手付集。三冊とも表紙に豊成が「秘(有控)印三卷之内」と墨書しているのにふさわしい伝書。三冊一筆。後人の書入れや貼紙訂正も少々ある。一部に朱筆入り。上巻は鸚鵡小町・木賊・卒都婆小町・小原御幸・関寺小町・檜垣・姨捨の七曲の手付(粒付・手付・心得の類が混じり、詳細)が主体で26丁。末尾に八頭の大小の手付を付記する。

中巻は「習事書」と題し、道成寺(すこぶる詳細)・乱・両役の流し・三読物色々・流入頭色々・半流色々・懺法・二段返・安宅延年・三ッ頭・大返シ・鷲・白拍子・本下略・半下略・白働

・金剛返・送留・翁無・本開口・半開口・置鼓色々・平調返りの各習事について、粒付の類をまじえ、大鼓・太鼓の手付をも併記したりして詳述する。本文33丁。

下巻は「老調之集」と題し、江口・野宮・熊野・玉葛・三輪・龍田・海土・鶺鴒・蟻通・放下僧・太刀堀・香椎・須磨源氏・松浦物狂・王取・反魂香・俊成忠則・賀茂物狂・高野物狂・砧・卒都婆流・善知鳥・藤戸・白楽天・道明寺の25曲の一調謡の手付。文句の右に粒や手を書き入れ、別に一調一管の際の注意などを末に書き添えた曲もある。本文38丁。

(a)「秘印」三卷之書に関する豊成書付 一枚
前本に封入。「元禄比之物成ベシ」と言う。

2 江戸後期筆「習事秘書」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙に題記。装幀を同じくする次本と一對の書らしく、豊成は「習(有控)印式冊之内 上之巻」と表紙に墨書を加えている。習物の手付で、文句の要所を抄写して墨筆で手付や粒付を書き入れる形。式三番(全文を引く)・放下僧小

歌・勧進帳・哥占・通小町・卒都婆小町・鸚鵡小町・小原御幸・木賊・姨捨・檜垣・礎・道成寺宝生流・石橋・望月の諸曲を収める。奥書が無いが、宝曆(安永頃)の書か。次本参照。

3 江戸後期筆『習事扣』 一冊

前本と同装同筆。豊成が表紙に「習(有替)印式冊之内下之巻」と墨書を加えている。五段次第・五段一声・清経心魂ノ刻・熊坂廻向ノ手・邯鄲夕顔金剛返シ・融笏ノ舞・松風身留・脇能置鼓・礼脇・大流・狂言置鼓・千歳風流・開口・松亀風流など、個々の習い事に関する手付・粒付・心得の類を集めており、末尾部分には大鼓習の頭付類をも収めている。表紙見返しの豊成の付記には「此習事扣書ハ寛文比杯之手配リ共色々替リタル所有、又近代ノ手配共替リタル所有、是ハ中比之書物ナルベシ」とある。

4 江戸後期筆『小鼓覚書』 一冊

仮綴小型横本。共表紙の題記は見返しの付記「此小鼓覚書ハ豊照書物之内ニ入込有タル書物也」と共に豊成の加筆。2の『習事秘書』と同筆。「小鼓替手」と首書した個々の曲の要所の替手の手付・粒付(文句を抜書して手付を傍記)や半越などの粒付、柏崎笹ノ拍子等の諸記事、一調謡の要所の手付・粒付(上宮太子・玉取・鼓滝・松浦物狂・横山・三井寺・放下僧等の11丁が前半。余白四丁を挟んで後半は「聞書之覚」と題する文章体の諸心得約30ヶ条七丁(江口一セイ、江口クセマイ、道明寺脇能ニスルトキ、卒都婆小町ノ次第ノ事、本ノ頭ノ事、有紋無文ノ囃子など)。

5 江戸後期筆『風鼓秘曲集』 天地人三冊

袋綴の半紙本。紺表紙。切箔散らし斐紙題簽。奥書なし。文章での説明と粒付・手付を混じて記す小鼓の秘伝集。天の冊は、式三番・脇能置鼓・礼脇・開口・風流・半開口・座敷開口・僧開口・翁無・狂言置鼓・法会舞・五段次第・五段一声・本流・八頭・修羅置鼓・三番目置鼓・見掛置鼓・四段次第・刻詰次第・着ヌ道行・上り僧下り僧・平調返・甲ノ掛・真物着・半流・白拍子・白働・延年・笏ノ舞・懐中・膝行・見留・合掌留・送り留・大返・半返・二段返・下略・半下略・雷声・諸口伝・次第一声名・打様心持・稽古心持・能動大意・能始リ・鼓矢声・拍子真理・用鼓文字・船立合・弓矢立合の諸項(目録による)から成り、1など家伝の諸書に基づいて整理したものらしい。地の冊は、懺法・乱・鷲・道成寺・石橋・望月・鸚鵡小町・木賊・伯母捨・檜垣・関寺小町・読物を収め、秘曲の手付集。人の冊は、一調手付集と言うべき内容で、三井寺以下82曲の文句抜書に手付を書入れた部分が主体で、冒頭に一調打様之事、末に謡無き時の一調・蘭拍子一調が付加されている。

6 豊綿筆「関曲一調書」 一冊

袋綴の中型横本。共表紙に「曲舞」と題記。奥書が無いが、末に「豊綿様御覚書也 和(草名)」と豊和(豊照)の識語があり、豊綿(文政八年没)筆と見られる。関曲(曲舞謡)の文句を書写し、朱で手付・粒付を書き込む。香椎・上宮太子・須磨源氏・俊成忠度・実方^{*}・鼓滝・嶋廻・近江八景・賀茂物狂・松浦物狂・初瀬六代^{*}・歌占・玉取・径山寺・隠岐院・同・舞車^{*}・同・横山・

太刀堀の20曲を収めるが、*印の二曲には手付が無い。見返しに豊成の筆で「闌曲一調書 豊綿」とある。

7 江戸後期筆青表紙大本「式三番翁立」 一冊

袋綴*。表紙には題記なく、本文冒頭に右の如くある。式三番の詳細な小鼓手付で、故実・作法の類も記す。△○●ツチの記号に掛声を傍記して、頭取・胴脇・先手の三人分の粒付を並べて書き、謡の文句もある。三番叟の部分の粒付はやや簡略。白紙一丁を置いた末尾に「瀬戸氏源義堅秘而写之」とあるが、瀬戸義堅については不明。以下三本と同内容で、ことに次本とは文字づかいまで酷似する。先後関係が不明確ながら、本書を転写したのが次本らしい。文化八年奥書の10よりは早い時期の書写。

8 江戸後期筆中型横本「式三番翁立」 一冊

仮綴。無表紙。前本と同内容で、末に瀬戸義堅の識語もある。

●ではなく○を用い、掛声が「エイ」ではなく「ヘイ」となるなどの相違はある。前本との先後関係が不明確ながら、稀に記事の脱落?があり、本書が転写本らしい。

9 江戸後期筆仮綴大本『式三番翁立』 一冊

共表紙に題記。●を①に改め、一部の文字が違い、掛声が前本同様「ヘイ」になっているが、7の影写に近い転写本で、字配りはすべて7と同じ。末尾の瀬戸義堅の識語は無い。

10 文化八年豊照奥書『翁打方』 一冊

袋綴の大本。薄茶色表紙。雲母模様題簽。題簽の書名は違い、冒頭の見出しも「式三番翁」と改めているが、内容は前三本と同じく、7の模写本と認められる。但し粒付は記号ではなく、

大鼓の分■●以外はホ・タ・チ・フ・ツの文字で示す。末尾に「文化八年八月廿一日 観世豊照」と奥書がある。前三本に無い加筆が少々あり、注記などに朱筆を用いる。

11 享和三年豊和奥書『習事書』 一冊

袋綴の小型枕本。薄茶色表紙左端に題簽がある。料紙は薄葉紙で、本文墨付16丁、余白28丁。最終丁に「享和三亥年三月十一日 観世豊和(花押)」と奥書があるのは、最初の記事と同じ頃に書いたものであろう。その後書き継いだもので、文政年間の演能に基づく記事が多い。礼ワキ粒付・三番目置鼓調留粒付・観世方道成寺乱拍子粒付・檜垣之事・角田川念仏之打様之事・松風見留・大返・宝生望月ノ段之事・今春流乱七段・宝生道成寺之事・朝長饑法之事・昭君之事・観世方望月・延年舞など、習事に関する手付や心得が主体。末部の嘉永二年の宝生海人懐中舞と宝生老松紅梅殿の記事は豊成の加筆。

12 享和三年豊和奥書宝生流「望月」手付 一冊

仮綴半紙本。無表紙。宝生流寛政版を影写し、朱筆で小鼓手付を書込む。末尾に「享和三年十月十八日 観世豊和」と奥書。

弘化二年九月宝生大夫所演の番組を付記。

13 江戸末期筆宝生流「望月」手付 一冊

仮綴半紙本。無表紙。前本の模写。朱の手付は若干用語などを変更している。奥書が無いが手付は豊好筆らしい。

14 文化頃豊照筆小鼓手付入り習事五番謡本 一冊

袋綴の中本。薄茶色表紙。長型題簽に曲名を列記。観世流節付で恋重荷・砧・卒都婆小町・檜垣・鷺の五番の謡曲を書写し、

空欄や行間に墨・朱・萌黄色の三色で手付や粒を書き込む。五番の曲名を列記した扉に「豊和」、末に「豊照(花押)」と署名があり、謡本を書写したのは豊和時代の豊照であろうが、豊成による後代の加筆も多く、萌黄色の分はほとんどそうらしい。朱筆はほとんど豊照の筆。恋重荷の末に文化十年の記事、卒都婆小町の末に「享和三五月 豊和(朱筆)の署名、檜垣の末に「享和元年二月十六日夜□之」の識語がある。左の八点の文書を挟み込む。

- (a) 砧「宮漏高く」前後の手付に関する文政十一年書付 一枚
「一通り弟子へ相伝之分」と豊成加筆。
 - (b) 宝生流砧「ほろほろはらはら」の部分の手付に関する豊成書付 一枚
 - (c) 豊照より鉄之亟あて砧要所手付に関する書付 一通
 - (d) 文化六年九月八日付伊右衛門あて砧クセ書付 一枚
 - (e) 文化二年豊和筆卒都婆小町立回り前後昔の手付 一枚
 - (f) 豊照(朱)・豊成(墨)兩人筆檜垣要所覚書 一枚
 - (g) 檜垣後場の要所の手付に関する書付 一通
 - (h) 豊成筆檜垣「いつをかぎるならひぞや」の部分の書付 一枚
- 15 文化元年豊和奥書手付入り謡本 一冊
望月・道成寺・石橋の三番綴。袋綴の小型中本。薄茶色表紙。題簽に三番の曲名を列記。観世流節付の謡本に朱や緑や墨で手付や実演の記録を書き入れてある。「文化元甲子年葉月日 豊和(印)」と奥書。左記六点の文書を挟み込む。
- (a) 慶応三年豊成筆喜多流望月書付 一通

- (b) 豊成筆喜多流望月相違部分書付 一枚
 - (c) 宝生流蘭拍子粒付その他書付 二通
 - (d) 天保三年豊成筆道成寺次第書付 一枚
 - (e) 弘化三年豊成筆道成寺急ノ舞書付 一枚
 - (f) 豊成筆道成寺間狂言とワキ・シテ掛合文句 一通
- 16 文化年間豊和筆、芸事覚書 一冊
仮綴小型中本。共表紙中央に「他見無用」、右に「文化元年甲子三月吉日」、左下に「観世豊和」と墨書。芸事に関する断片的メモ帳で、相手役流儀による相違についての事項が多く、狂言の囃子の事も多い。文化三年の記事もある。

- 17 文化三・四年豊和筆『覚帳』 一冊
仮綴の中型横本。共表紙。表紙や後表紙の墨書によれば文化三年十一月から翌年十一月にかけての豊和の芸事メモ帳。冒頭部は、真序森田・盤渉楽同・乱同・乱春日の笛唱歌。続いて朝長・柏崎・陀羅尼落葉室生・仏原・小塩・野宮・葛城・歌占・大瓶猩々・羽衣・夜討曾我・逆鋒・東北・胡蝶の手付(比較的簡略)や断片的諸記事など。表紙に「他見無用」とある。
- 18 豊和印喜多流『御裳濯』手付 一冊
袋綴の半紙本。茶色表紙。白題簽。近衛流書体で御裳濯の謡本(節付喜多流)を書写し、朱筆で手付や粒を書込む。末尾に「豊和」印がある。手付は簡略。
- 19 豊和署名観世流『玄上』手付 一冊
仮綴の大本。共表紙に題記と「豊和」の署名がある。観世流玄上の詞章を書写し、朱筆で簡略な手付を書込む。

20 江戸後期筆観世流「夕顔」手付 一冊

21 江戸後期筆観世流「正尊」手付 一冊

両冊同装で、仮綴半紙本、無表紙。ともに観世流謡本を模写して手付を朱筆で書込む。奥書は無いが豊和筆か。

22 手付入り六番合綴本 一冊

袋綴の半紙本。六番の曲名を列挙した厚表紙は後補のもので、性質を異にする手付入謡本六冊をもとの表紙をも残して合綴した本。感陽宮以外の諸曲には小鼓手付が書き込まれているが、精粗の差が大きい。次の諸曲を収める。

〔金剛流富士山〕 薄茶色表紙。手付簡略。「豊和」の印がある。

〔観世流版本感陽宮〕 共表紙。奥書の類なし。

〔宝生流調伏曾我〕 共表紙。奥書はないが、朱と緑で書き込まれた手付は豊成の筆。

〔宝生流歌占〕 共表紙。手付は墨・朱・緑の三色・奥書「天保三辰年五月 豊成」。

〔宝生流小鍛冶〕 共表紙。「文久三癸亥年正月 豊好」と奥書があるが、朱・墨の小鼓手付は豊成の筆。

〔上掛り求塚〕 共表紙。謡本は観世流節付。末に朱で「文化四丁卯年四月十八日 豊和」とあるが、三色の手付のうち緑の分は後年に豊成が書き入れたもの

23 文政九年豊照筆『色々扣』 一冊

色紙大の升型本。大和綴。打曇り模様のある色紙四倍大の紙を折り重ねて料紙に転用している。共表紙中央に題記し、右上に「文政九年二月二日」、左下に「観世九郎豊照」とある。井筒一

セイノ事、乱拍子観世大夫方弟子ニ相伝之分手付、野守白頭之事の三ヶ条を記すのみで、全八丁のうち六丁は白紙。

24 文政十二年豊榮所持脇能六番手付 一冊

仮綴の中本。高砂・白染天・養老・加茂・難波・弓八幡の六番の囃子所の文句を抜書し、間拍子・手付・心得を書き込む。曲名を列記した共表紙左下に「豊榮」、本文末に不明の花押、後表紙に「文政十二己丑年正月十八日」とある。豊榮は豊照の長子で豊紀の養子だったが、文政十二年十二月廿一日に歿した。手付が豊榮筆か否か不明確。

25 文政天保年間豊紀筆『習事扣』 一冊

袋綴の中型横本。黄土色表紙に題記。見返しに「観世新九郎豊紀(花押)」とある。文政四(天保十二年)の年記が散見し、長期にわたる豊紀の芸事書留。首部の笛唱歌は前本と似る。以下個々の曲の習事に関する記事が並び、宝生熊野三段之舞・朝長儼法・重キ道成寺・嵐山白頭・八島弓流・松竹風流など。後半は自己が勤めた際の記録。末尾五丁分は子の豊成の弘化三年・安政三年の道成寺出勤の書留。

26 天保年間豊成筆『一調扣』 二冊

袋綴の小型横本。青表紙。両冊とも表紙に題記し、一冊は「天保巳四 豊成」、一冊は「天保八酉 豊成」の墨書がある。第一冊は江口以下25曲、第二冊は二人静以下30曲の一調手付集。かなり長期にわたる書写らしい。手付は朱筆が主体で墨筆も混じる。55曲のうち天鼓のみは嘉永七年本(14)に含まれていない曲。

27 天保八年豊成奥書、小鼓手付・太鼓頭付等 一冊

袋綴の小型中本。黄土色表紙。末に「天保八丁酉年正月下旬
豊成(花押印)」とあるが、かなり長期にわたって書き留めた芸
事関係の書留集。弓八幡・西王母・東方朔・和布刈・嵐山・江
の島の小鼓手付(謡の文句全文を写し、朱や墨で手付や心得の
類を書き込む)、惣右衛門流の太鼓頭付(巻絹(惣神楽の笛の唱
歌)・護法・伏見・船橋・陀羅尼落葉・車僧)、綾鼓手付(宝生
流節付で全文を書写して朱で書き込む)、豊干太鼓頭付、森田
流盤渉楽・同神楽・一噌流神楽、宝生流求塚謡本など。その他
孝経の全文、宝生流内外名寄、一調書上などもあり、断片的記
事も多い。左の四点を封入する。

(a) 安政二年豊成筆松虫打上替ノ手配り 一通

(b) 楽・神楽の替手に関する豊成書留 一枚

(c) 天保十三年豊成筆小鼓起原に関する書留 二枚

(d) 融遊曲太鼓書付 一枚

28 天保十二年以降豊成筆『笛章歌并色々覚書』 一冊

袋綴小型横本。浅葱色表紙に右の題記と「天保十二丑年林鐘吉
辰 豊成」の年記(後表紙にも同年記の観世新三郎豊成の署名)
がある。前半は森田盤渉楽・鬘之音取・序之舞カカリ・本ノ音
取・掛りより盤渉楽・一噌盤渉楽・大ベシ・イロへ・盤渉序之
舞・五段神楽七ツゆりなどの笛唱歌が主体で、途中に文化十年
観世大夫山姥雪月花之舞の記録などの異質の記事も混じる。井
筒物着・金春鶺鴒祭・合甫一拍子・唐船・田村長胡床・紅葉狩替
装束・宝生石橋連獅子・観世安達原急進之出・金剛高砂真之伝
など、特殊な能や小書の型付・手付で、嘉永年間の演能記録に

基づく。最も新しい年記は嘉永六年。天保十二年以後嘉永末年
までの書留であろう。左の二点を封入。

(a) 文久三年豊成筆岩船出羽等に関する書付 一枚

(b) 明治十三年梅若実所演の撰待に関する書付 一枚

右の紙背は何かからの抜書らしい「山伏撰待解」。

29 天保十三年以降豊成筆『小鼓習事書』 一冊

袋綴の小型中本。水色表紙。赤色題簽、末に天保十三年五月の
豊成の奥書があるが、その頃から文久三年にわたる期間の豊成
の書留で、首部は豊綿・豊照・豊紀らの書留の写しが主体。途
中から豊成自身の見聞・出勤に基づく書留で、習事に関する事
が多く、鼓以外の事にもわたる。出勤した番組を記事の末に付
載していることが多い。三輪誓納・江口替之打切・葵上梓之出
・杜若素囃・宝生高砂作物など、内容多彩。左の文書を封入。

(a) 松風見留書付 一枚

(b) 豊成筆鬘置鼓之事(笛唱歌と粒付) 一通

(c) 宝生杜若沢辺之舞一噌唱歌 一通

(d) 地拍子割付け粒付(碁盤風罽紙使用) 一枚

(e) 豊成筆宝生来殿金春流太鼓手付 一通

(f) 明治十一年豊成筆正尊起請文後半粒付 一通

(g) 延年之舞笛唱歌(カカリ・三段目) 一枚

(h) 卒都婆小町謡に関する書付 一通

(i) 宝生融酌ノ舞足取図(以上三種同封) 一枚

(j) 弘化四年豊成筆宝生流起請文手付(大鼓金春流) 一通

(k) 起請文手付 一通

- (l) 文政六年豊照筆宝生松風灘返し手付 一枚
 (m) 豊成筆杜若イロへ書付 一枚
 (n) 嘉永六年豊成筆宝生高砂作物書付(神舞手付等) 一通
 (o) 安政六年筆杜若恋之舞春日流唱歌 一枚
 (p) 万延元年豊成筆金剛石橋書付 一枚
 30 天保十五年豊成奥書『当流色々扣』 一冊
 袋綴の小型中本。水色表紙。有杵題簽。末に天保十五年の観世新九郎豊成の奥書があるが、天保年間の書付は首部のみ。大半は安政以降の記事で、末は明治十年。実演記録に基づく芸事関係の記事が大半ながら、故実の記事も混じる。末の三分の一は白紙。左の八種の文書を封入。
- (a) 三太郎流次第・一セイの手付 一枚
 (b) 猩々乱に関する考証 一枚
 (c) 宝生融遊曲金春太鼓書付 一枚
 (d) 金剛融遊曲金春太鼓書付 一枚
 (e) 慶応三年喜多六平太安宅・望月・猩々乱壺出番組 一枚
 (f) 明治十年豊成筆饑法太鼓手付 一枚
 (g) 同右、森田流修羅音取唱歌 一枚
 (h) 宝生望月獅子大鼓・笛頭付(f)hの三点一包み 一枚
- 31 嘉永五年豊成筆宝生流『道成寺』手付 天地人三冊
 仮綴半紙本。各冊とも共表紙に「嘉永五壬子年閏二月十六日」「豊成」「宝印三冊之内 天」などと墨書があり、三冊が一組のもの。天之冊は「宝生 道成寺」と題し、宝生流謡本を書写して朱筆・墨筆で手付や心得を書き込む。地の冊は「宝生 道成寺乱

拍子手附」と題し、乱拍子前後の詳細な粒付・手付。人の冊は「宝生流闌拍子手配附」と題し、地の冊の草稿的内容。天と地の冊の末には表紙の分と同年記の豊成の朱筆奥書がある。

32 豊成筆観世流『道成寺』手付 一冊

仮綴半紙本。観世流道成寺謡本を書写(ワキ語りを省略)して朱筆(一部に緑・墨で加筆)で手付を書加えた部分が前半。後半は、闌拍子片山九郎右衛門江引渡シノ分、安政四年青山下野守へ引渡シの分。見掛置鼓手付、三段次第手配り、乱拍子足づかい、闌拍子打方など。豊成から乱拍子を相伝したシテ方や小鼓弟子の氏名、明治十二年の喜多流高田伊右衛門への相伝の事情なども付記。共表紙に曲名と「豊成」の署名がある。

(a) 豊成筆観世道成寺乱拍子書付 一枚

33 豊成筆宝生流『来殿・浦島手付』 合綴一冊

仮綴半紙本。共表紙。別々の本だったのを合綴したもの。来殿は中入前からキリまでの詞章を書写し、朱・墨の両筆で手付を書き込み、末に嘉永五年正月に宝生弥五郎が雷電を改作すべく豊成に小鼓手付の改訂を依頼した際の文書の写しや、新之丞方待謡などを付記する。浦島は後場の詞章に墨筆で小鼓手付を書き込む。

34 豊成筆宝生流『姨捨』手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に「宝生 姨捨」の題記と「豊成」の署名がある。宝生流寛政版を模写し、朱筆(一部は墨・緑)で手付や粒を書き込む。末丁に嘉永五年閏二月廿五日の宝生大夫所演の際の相違点(一セイ・序之舞)を加筆。左の二点を同封。

- (a) 姨捨要所太鼓頭付(謡詞章に朱筆で傍記) 仮綴半紙本 一冊
- (b) 宝生姨捨金春太鼓手配(今夜のあきかぜ…) 一枚
- 35 嘉永六年以降豊成筆『観世方能頭附』 一冊
 仮綴半紙本。共表紙に題記し、「嘉永六甲寅年 二月良辰 豊成」
 「草稿追々ニ書也」などと墨書。観世座の所演曲172番の曲名を
 一頁二曲ずつ五番綴謡本の組合せ順に列記し、各曲の舞や登
 場の囃子事の種類を注記した書。曲によって精粗の差が著しく、
 姨捨・鸚鵡小町・関寺小町・道成寺・木賊・石橋・恋重荷・礎・
 鷲・望月の十番は曲名のみ。朱筆をまじえ、長期にわたって書
 き込んだ跡が顕著である。左記六点の書を封入する。
- (a) 破之舞・太鼓物イロエ手付 一通
- (b) 雲林院ワキ謡書付 一通
- (c) 嘉永二年豊成等谷行(鉄之亟・彦太郎)書付 一通
- (d) 千手・土ぐも書付(五月晦日観世流番組裏) 一枚
- (e) 慶応三年筆第六天高安流道行 一枚
- (f) 羯鼓ヲ撃テ花ヲ催ス事(明皇雜録抜書) 一枚
- 36 嘉永七年豊成奥書、謡本書入「新曲十三番手付」 一冊
 袋綴の小型中本。青表紙。横型題簽に曲名を列記する。節付を
 も加えた観世流謡本(書体・書式は一樣でない)に朱や緑で詳細
 に鼓の手付を書き込む。曲の末や空欄に注記の記事も多い。代
 主・逆矛・忠信・禅師曾我・吉野天人・住吉詣・ゑぼし折・第
 六天・絃上・合甫・大瓶猩々・祝言岩船・祝言金札の十三曲。天
 明の新十番から恋重荷を除き、禅師曾我・絃上・岩船・金札を
 加えた形。奥書「嘉永七甲寅年正月良辰 観世新九郎豊成(花押
 印・朱印)」。書き込みはすべて豊成筆。左記四点を封入。
- (a) 嘉永七年師走豊成筆メモ 一枚
- (b) 豊成筆烏帽子折切組観宝両流手付 一枚
- (c) 豊成筆絃上「岩越す波」考証 一枚
- (d) 豊成筆絃上「嬰子もおどる」考証 一枚
- 37 嘉永七年豊成署名『一調伝書』 天地人三冊
 袋綴(非線装)の半紙本。共表紙に題記。一調謡の文句を書写し
 て朱筆で粒付や手付を書き加えた一調手付集。各冊に「嘉永七
 甲寅年林鐘吉辰 豊成」と署名があり、朱で手付を書き入れたの
 が豊成らしい。三冊とも「秘印 三卷之内」と表紙に墨書する。
 天の巻は「内之部 常一調伝書」と題し、江口・高砂・難波・三
 井寺・雲林院・源氏供養・桜川・殺生石・籠太鼓・鳥追・土車
 ・花筐・蟬丸・三井寺・小督・笠之段・網之段・玉之段・放下
 ・僧・善知鳥・女郎花・錦木・松虫・八嶋・殺生石・夜討曾我・
 道明寺・白楽天・難波・高砂切の30曲。地の巻は「外之部 常一調
 伝書」と題し、芭蕉・采女・半部・班女・雲雀山・二人静・千
 手・杜若・百万・柏崎・鐘之段・笹之段・鶉之段・熊坂・鶴前
 ・籠・舟橋・小袖曾我・春栄・弓八幡の20曲。人の巻は「別一
 調伝書」と題し、老松・白髭・蟬丸・花筐・東岸居士・鶴・藤
 戸・阿漕・俊成忠度・感陽宮の10曲。計60曲。
- (a) 豊成筆一調伝書奥書草稿 二枚
- 前本の天・人の巻の末に封入。一つは「天地人三卷一調手付如
 此 草稿故誤等可有 此後能々相改 別本ニ書直置べし」。他
 の一通は同意異文。年記はともに「嘉永七年六月吉日(良辰)」。

38 弘化(安政頃)豊成筆『役要手控』 一冊

仮綴小型中本。共表紙に題記と「弘化元辰年 十二月吉辰 豊成」の年記・署名があり、末にも嘉永の年記があるが、弘化元年以降安政三年に至る間の豊成の芸事覚書。出勤した際の書留が主体で、本丸・西丸・二丸・一橋御殿、その他諸大名家などでの催しでの、宝生流・金剛流相手の際の記事が比較的多い。宝生融笏之舞・宝生葛城大和之舞・春日竜神白頭別習など、末近くの記事は詳細。左の十点の文書を封入する。

- (a) 羽衣本越一セイ・ハノ舞書付(罫紙) 一枚
- (b) 右の写し(札幌麦酒会社罫紙。鉛筆書) 一枚
- (c) 同右(同右。朱筆書) 一枚
- (d) 大鼓粒付 一枚
- (e) 大小鼓粒付紙片 三枚
- (f) 養老新之亟方道行文句 一枚
- (g) 葛城大和舞太鼓手付 一通
- (h) 嘉永四年豊成筆金剛老松・仁右門方百万間セリフ 一枚
- (i) 熊野三段舞・膝行手付 一枚
- (j) 宝生葛城大和舞(金春流太鼓)書付 一枚

39 安政二年豊成奥書、小鼓手付・注釈入り謄本 上中下三冊

袋綴の大本。磨出し模様入り黒表紙。打曇り模様題簽に曲名を列記し、「三卷之内」「上(中・下)」と付記。三冊とも末に「安政二乙卯年孟夏良辰 豊成(催花堂印)」と奥書がある。観世流または宝生流の版本謄本を節付まで影写し、約半数の曲の上欄や本文中に手付や囃子事の注記や語句の注釈などを書き込む。

朱・緑も混用。書入の精粗は一様でない。すべて豊成等であろう。料紙は薄葉紙。所収曲は次の通り。(※印が書入のある曲。宝は宝生流謄本を影写した分)

〔上Ⅱ本文墨付136丁〕*楊貴妃・*夕顔・*放下僧宝・*歌占宝・*安宅・蟻通・通小町・*善知鳥・阿漕・*昭君宝・千手。
〔中Ⅱ本文墨付110丁〕 弱法師・*藤戸・*当摩・俊寛・蟬丸・景清・護法宝・*遊行柳・定家。〔下Ⅱ本文墨付85丁〕 弓矢立合・*隅田川・綾鼓宝・求塚宝・撰待宝・小原御幸。
左の五点の文書を挟み込む

- (a) 慶応二年八月豊成筆楊貴妃装束付書付 一通
 - (b) 安宅演出に関する豊成書付 一通
 - (c) 当麻出羽二段返観世流小鼓金春流太鼓粒付・手付 一枚
 - (d) 喜多流遊行柳小鼓打様に関する豊成書付 一枚
 - (e) 嘉永五年豊成筆金剛流大原御幸書付 一枚
- 40 安政二年豊成奥書『風鼓覚書』 一冊
- 袋綴の半紙本。格子模様灰色表紙に朱色模様白題簽。墨付31丁。余白27丁。末尾に「安政二乙卯仲秋日 秦豊成(印)」と奥書があるのは、30などと同様書初めに記したものであろう。当流五段次第・当流真之一声・九郎兵衛方相手之時五段次第・同真之一声・当流本越一声・和布刈之次第など、相手役や曲ごとの打方をも含む次第・一声の各種の手付・粒付集。左の三点を封入。
- (a) 石川丈山略伝書抜 一通
 - (b) 「懺」字に関する字典からの抜書 一枚
 - (c) 森田流舟弁慶舞唱歌に関する書付 一枚

41 安政二年豊成奥書宝生流『豊干』手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。奥書「安政二年卯弥生良辰 豊成」。
謠本を模写し、朱筆(一部は墨・緑)で手付を書き込む。

42 江戸後期筆『宝生源氏供養曲文句入』手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記と豊成の署名があるが、クセの詞章
を書写し朱筆で手付を加えたのは豊成以前らしい。表紙裏に加
筆した弘化四年二月廿四日松平出雲守邸での宝生大夫所演の記
録は豊成筆。左の一点を同封。

(a) 源氏供養クセ前後の手配り書付(豊成加筆) 一枚

43 豊成筆『道明寺』『飛鳥川』手付 合綴一冊

仮綴縦長半紙本。本来は別々に書写した本を合綴したもの。道
明寺は明治十七年刊金剛流山岸本を模写し(同書の直しの分を
朱筆で書く)、緑筆で小鼓の手付や心得を書込む。奥書は無い
が豊成筆。飛鳥川は詞章を書写し、朱筆で手付を書込み、末に
慶応三年金剛鈴之助所演の際の装束付を付記する。奥書「慶応
三丁卯年四月廿九日写之 豊成」。

44 慶応四年豊成奥書『猩々乱』手付 一冊

仮綴小型半紙本。観世流謠本・下り端森田流唱歌(小鼓手付を朱記)
・乱森田流唱歌(同上)・金春流乱(六段七段の唱歌と手付)・下り端諸
流段数・乱の段数・一噌流乱唱歌(手付朱記)・七段乱手付・観世
呂掛リ之乱(唱歌と手付)・宝生七人猩々・喜多乱壺出など、乱の
手付集。末尾に「慶応四戌辰八月 観世新九郎豊成」と奥書が
あり、共表紙に「豊好」ともある。

45 文化年間豊和筆、特殊謠手付 七冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記と「豊和」の草名があ
る。翁・弓矢立合・勸進帳・起請文・蟻通・千手朗詠詩・琴う
たの七冊。謠の詞章を書写して朱筆で手付を書き入れているが、
翁には手付が無く、琴うた(咸陽宮の一部)には節付すら無い。
未完のまま終わったのであろう。弓矢立合に「文化二乙丑年七月
廿二日 豊和(印)」、千手朗詠詩にも同年記、翁に「文化三季十
月廿三夜 豊和」と奥書があり、他冊も同じ頃の書写らしい。

(a) 豊成筆九祝舞相違文句拔書(翁の冊に同封) 一枚

46 文政十三年豊成奥書『起請文』手付 一冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記と「豊成(花押)」の署
名がある。正尊起請文の部分を片仮名で一行九字に書き、節付
を加え、小鼓の粒を右に、大鼓の粒を左に書加える。小鼓の分
は朱筆、大鼓の分は墨筆が主体。末に「文政十三庚寅年七月日
宮増十一代 観世新九郎 豊成(花押・朱印)」と奥書。

47 江戸末期筆『起請文 大小之手附』 一冊

前本と同装。共表紙左下に「豊成」とあるのは豊成が前本の署
名を模写したもの。内容も前本の写し。但し大鼓の分を緑筆、
小鼓の分を朱筆で書分け、手付の用語を少々言い変えている。

48 文化年間豊和筆、一調謠手付 十冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。玉之段・土車・鳥追・班女・鶴曲・
放下僧切・松虫切・三井寺道行・三井寺曲・弄太鼓の十冊で、全
冊朱の手付入。放下僧の末に「文化三季十一月廿四日 豊和(草
名)」と奥書があり、他冊も同じ頃の書写であろう。

49 豊成筆、一調謠手付 八冊

45等と同装。千手朗詠・高砂・土ぐるま・土ぐるま・鳥追・放下僧・松虫・籠太鼓の八冊。一調謡の部分を書写し、朱で手付を加えるために用意した本であろうが、千手朗詠と土車の一冊以外は手付未記入。六冊に豊成印があり、前本と一緒に包んだ包紙の曲名下に豊成が自己の筆である由を記している。

50 豊成筆、観世流謡本書入れ手付 四冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記し、あこぎ・通小町・絃上・禅師曾我の四冊。阿漕以外の三冊は末に「豊成」の朱印があり、四冊を包んだ紙に曲名と「豊成書」の識語がある。観世流謡本を書写して手付を朱筆または緑で書込む。但し絃上の朱筆は節の直しで、手付は無い。

51 嘉永七年筆『一噌流笛唱歌』 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記と「嘉永七 甲寅年」の年記の他に、右肩に「甲印四冊ノ内 老号」とある。奥書なし。神舞・男舞・安宅舞・中ノ舞・下り端・大ベシ・カツコ・早舞・早笛・序之舞・舞働・楽・神楽の笛唱歌。奥書なし。

52 元治元年豊成奥書「一噌流笛唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に所収楽名を列記し、右肩に「甲印四冊ノ内 式号」とある。序之舞・真之序・楽(小鼓手くばり付)・富士太鼓掛リ・邯鄲掛リ・唐船掛リの笛唱歌の後に、「右一噌流笛唱歌六ヶ条家元一噌幸太郎方を借用致写置者也 右之書不許外見者也 元治元 甲子年霜月廿九日 豊成」と奥書があり、さらに邯鄲空下唱歌(小鼓手付入)を付記する。唱歌は豊成とは別筆らしい。後表紙に「豊好」と署名。

(a) 豊成筆、真之序の序の跡の小鼓に関する書付 一通

笛が一噌・森田の場合、大夫が観世・その他の場合の注意。

53 文久二年豊成筆『一噌神楽太鼓金春付』唱歌 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記し、右上に「甲印四冊ノ内 三号」、左下に「文久二戌年十月良辰 豊成」とある。余白や唱歌の後に神楽に関する諸注意を付記し、末にも同年記の奥書がある。

54 元治元年豊成奥書『一噌流上ガカリ惣神楽』唱歌 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記(付記あり)し、右上に「甲印四冊ノ内 四号」、左下に「豊成」とある。唱歌の他に惣神楽に関する注記もある。末尾奥書「元治元 甲子年霜月廿九日 豊成」。

55 豊成筆『森田楽唱歌』 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記し(付記あり)、右上に「乙印二冊ノ内」、左下に「豊成」とある。楽と邯鄲楽の唱歌で小鼓手付をも朱記する。富士太鼓楽ノカカリ、その他付記の類が多い。

(a) 天保十四年豊成筆、朝長懺法左吉流太鼓手付 二枚

真草行の三種ある内の草と形の打ち方の手くばり。

56 豊成筆「森田流乱唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に内容を列記し、右上に「乙印二冊ノ内」、左下に「豊成」とある。八拍子割の野線を印刷した特殊な料紙を主体とし、観世乱(左吉方太鼓付を朱記)・宝生鷲乱・観世乱(金春太鼓付を朱記)の唱歌を書き込む。三曲の途中の普通紙に小鼓手付の類を付記する。

(a) 豊成筆「金春流乱付ニ添書付」 一枚

57 豊照筆『森田流笛章歌』 一冊

小型縦長本。序之舞以下各種舞事のカカリやオロシの部分の唱歌集。末尾は「是ヨリ以下藤本生五郎ニ聞書」と注する豊成の追記で、前半にも豊成の加筆がある。末に「豊照」と署名。

58 豊成筆「春日流盤渉楽」唱歌 一冊

59 豊成筆「一噌流盤渉楽」唱歌 一冊

60 豊成筆「春日方乱之譜」 一冊

右三冊同装で、薄葉紙を用いた仮綴中本。各冊表紙に「豊成」と署名。三冊一緒の包紙に「安政二卯年八月 新九郎豊成」とある。

61 万延元年藤本森助筆『森田流翁唱歌』 一冊

仮綴中型横本。「万延元年十月吉日 藤本森助書之(朱印「正矩」)」と奥書。袋裏に「此翁一式ノ章歌ハ森田流弟子藤本森助之章也 観世新九郎豊成」とある。

62 万延元年豊成筆「開口音取置鼓」 一冊

仮綴中本。音取の唱歌に朱で小鼓の粒を書き添え、青でワキの仕方を書き込む。末に「ワキノ仕方ハ権之助書也」とあり、青筆の分は進藤権之助の筆。笛は森田流。表紙裏に、万延元年十月六日に御本丸移徒祝儀御能仰せ出され、進藤宅で打合せの折に控えとして書いた由、豊成の付記がある。全四丁。

63 万延元年豊成筆「開口置鼓」 一冊

仮綴中本。前本の写しで、笛の唱歌を除き、小鼓粒付と青筆のワキ仕方のみ。この青筆も進藤権之助の筆の由、豊成が付記。

64 文久二年豊成奥書、観宝両流融笏之舞左吉方太鼓手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に内容を列記し、右上に「丙印巻冊」左下

に「豊成」とあり、末尾にも「文久二壬戌年五月 豊成」と奥書がある。観世融笏之舞の観世流太鼓手付(八拍子割印刷罫紙の分、文章体に別記の分と両様)と、宝生流融酌之舞の観世流太鼓手付(文章体)。宝生の分は足取図の略図も付記。

65 豊成奥書、獅子森田流唱歌・観世流小鼓手付 一冊

仮綴中本。共表紙に内容の略記と「豊成」の署名がある。望月獅子と石橋獅子の小鼓手付を、森田流唱歌の右に朱記する。末尾に「右ハ鉄之亟清清所望ニ付別ニ認メ遣し申候節、如此扣書記置 豊成」と奥書がある。

66 豊成筆『朝長儼法』左吉方双・形の太鼓手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。墨付三丁。末に「右ハ文政八酉年林鐘 於豊綿宅 清暘・豊照・鍊三郎・兵次郎、右打揃申合相済、其後豊照右ノ通双・形ノ二色控置タルヲ、又後ニ豊成仮ニ写シヲク者也」とある。大小の手付も付記。

67 豊成筆『一噌流盤渉楽』唱歌ならびに小鼓手付 一冊

仮綴中本。共表紙に題記と豊成の署名がある。唱歌の右に小鼓手付を朱記する。

68 中林筆『宝生新之丞謡謡入用之分』 一冊

69 豊成筆『宝生新之丞方謡拔書目録』 一冊

両冊合綴。ともに仮綴半紙本。68は下掛り宝生流の文句がシテ方宝生流と相違する部分の抜書集。共表紙の題記の左に「右宝生大夫方相手之節之諷方也。依之、宝生流謡本ト引合、相違之処而已抜書ナリ。余ハ宝生本之通也 中林控」と注記。中林は金沢在住の新九郎家の弟子。69は68のイロハ別索引風の目録で、

68の上に合綴し、共表紙に題記と「催花堂」の署名がある。

70 豊成筆、新之丞方俊寛・船弁慶ワキセリフ 一冊

仮綴大本。全四丁。署名は無いが豊成筆らしい。俊寛は名ノリと一セイとその後のセリフ。船弁慶はアイとの問答。

(a) 船弁慶セリフ書付 二枚

一枚は中入直前からアヤカン問答にかけて、他の一枚は後シテの出の直前の文句が主体。70の補足。

71 明治元年大蔵虎長筆「開口・弓矢立合・松竹風流」 一冊

仮綴大本。末に「明治元辰年霜月改正之 大蔵千太郎虎長(花押・朱印)」とあり、54と一対の書。若宮祭の松之下式に新形式で勤めた際の文句と節付。立合と風流の分には小鼓手付も少々見られる。

72 服部小錦治筆『撃鼓譜』 一冊

綿装の大本。紙貼り厚表紙に添えた布題簽に書名と住所氏名印がある。小錦治が小鼓を稽古した際の、謡文句抜書に傍書した手付の類を集めて綴じたもの。能野ロンギ・鶴亀キリ・蟬丸花の都・船弁慶クセなど、初歩的な曲ばかり。小錦治は素人として一時小鼓を稽古したのであろう。

冊子本追加

〔四の項〕

36 蔭山俊蔵刊、森田流楽・神楽唱歌 一枚

283×365の厚葉楮紙に、野引き枠内に、表に楽、裏に神楽の唱歌を刷る。包紙の豊成書付に「豊綿時代門弟蔭山俊蔵ト云者自身是ヲ書テ板ニヲコシタル也」とあり、文政以前の刊。小鼓手付などを書込むための印刷物か。

〔六の項〕

35 江戸末期筆『観音懺法』 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。観音懺法の来歴。

〔七の項〕

19 江戸中期筆観世流節付『式三番』 一冊

仮綴半紙本。「どうくたたり」の形で、明和改正謡本以前の写本。二日・三日の千歳の謡の分を末に記す。

20 江戸末期筆観世流節付『花がたみ』 曲舞 一冊

仮綴中型横本。共表紙に題記と豊成の印がある。朱筆直し詳細。

九 元信(休齋宗与)関係書付

——書付類その一——

慶安三年元信筆『仕手出立之事』 一通

懐紙一枚。習物の能十番—檜垣・嫉捨・鸚鵡・関寺・木賊・鐘卷・鷲・猩々・安宅・石橋—のシテの装束付。識語「右之出立道叱・宗治御相伝之通也 寅極ノ六 同正右衛門元信 観世宗兵衛殿」。物兵衛豊俊は元信の甥(兄豊勝の子)。古い包紙には「習之拍子仕手出立付之事」と上書。

2 万治元年十月三日付、観世宗与あて観世大夫重清起請文 一通
奉書一枚と牛王誓紙をつなぐ。前書に「一、なかし八頭并本五段之一声ノツモリ同出様」以下38ケ条の習事の名目を列記し、「右之条々依執心預相伝過分ニ存候 毛頭他言申間敷候 但家ヲ継一子斗ハ如我等堅ク誓紙させ 弥末孫迄家ヲ継一子ニならてハ相伝申間敷候 其上一子ニいたさせ候誓紙ニ而も右之通堅ク誓紙ヲいたさせ 代々一子ニも誓紙ニ而相伝請候様ニ可申付候 不申及候へ共 其方家へ我等家末孫迄無如在申合候へと可申付候 若其方ノ末孫ニ親ニ少年ニ而別レ候仁候ハ、右之条々覚不被申候ハ、此方家ヨリ相伝可申候者也」とある。牛王誓紙の末の署名は「万治元戊戌歳 十月三日 観世左近大夫重清(花押) 観世宗与老・観世新九郎殿」。相伝を受ける前に提出した起請文。重清は当時26歳。

3 宗与筆『相伝之覚』 一通

万治元年に重清へ相伝を予定した事項の列記。前本の前書とほとんど同内容。末尾に「観世宗与」と署名。大版美濃紙一枚。重清の誓紙提出に先立って宗与から与えた文書の控であろう。

4 万治二年卯月宗与あて観世大夫重清書状 一通

美濃紙大の楮紙一枚。檜垣の仕舞、平調返、翁なしの礼脇について質問。「万治二ノ卯月廿四日 観□(花押)」と署名。端書「観世宗与様□□ 観左近」。2の前書と関連する。

5 寛文三年宗与筆、父之丞延命冠者書付 一通

文句と型と鼓の打ち様の大概。「：無失念様ニ書付参せ候 寛文三卯十月十五日 同宗与 観世新九郎殿」とある。6の前半部と似る。包紙(6と一包)に豊成の筆で「父之丞小鼓打様 元信筆」と上書。

6 宗与筆、父之丞延命冠者・序破急真草行書付 一通

前半は5と似て、文句と打ち様。後半は前半と無関係で、「似我与左衛門書物之内ヌキ書」と首書し、「一、草ノ中ノ行 引ナトノ類也」など15ケ条。黄色半紙二枚継ぎ。署名なし。

7 宗与筆、薪猿楽南大門能図面 一枚

8 宗与筆、薪猿楽御社上り能図面 一枚

9 宗与筆、薪猿楽御社上り能図面 一枚

半紙大。7に観世十郎兵衛(重清)楽屋の位置が示されており、観世座が三十年ぶりで薪猿楽に参勤した慶安五年の書写と見られる。宗与も見物に下ったのであろう。配置等の概略見取り図。9は8の書直しの形で、包紙(立入殿あて書状)に「奈良宮

社二月ノ能ノ絵図有 亥ノ二月」とある上書も宗与の筆。亥は万治二年。慶安五年筆の分を万治二年に整理したものか。三点を一括した包紙には「奈良薪能組萬寛書」と上書。

10 宗与筆「昔名ヲ得シ者」 一通

奉書大の楮紙一枚。裏端書に「宗節被書置ヲ以ギヤウ迄ニセウツシ置也」とあり、観世宗家藏宗節筆の『昔名ヲ得シ者』の転写。但し観世代との模写が前、昔名人の記事の転写が後。署名なし。11と同じく宗与時代の書写であろう。

11 寛文元年宗与筆、面之作者之事・人形絵図ノ事 一通

半紙二つ折り。観世宗家藏の宗節筆『申楽談儀』の面の条の抜書と、同宗家藏の『二曲三体人形図』（宗節本は現存せず）についての略記。「当座ニ観太ニテ 寛文元うし九月廿五日書之」「権現様ニ存之風姿花伝ヲ写タル也」と末にある。

12 明暦二年宗与筆「永祿四年三好亭御成記」 一通

交漉紙数枚をつなぐ。「コレハサル所ニ有ヲ写 観世休齋宗与」と識語。首部に明暦二年までの年数書がある。能番組の部分のみの写しで、統群書類従所収本とは相互の誤りを訂し得る。

13 正保三年元信筆、慶長四年観世大夫聚楽勧進能番組 一通

大版粗紙横折り。表の両面に四日分の番組、裏の両面に勧進能故実や四日の振舞の次第など。『能楽盛衰記』所収の同勧進能記録と同系で相互に補い合う。正保三年までの年数書がある。

14 正保三年元信筆、天正廿年四月十五日関白秀次民部卿法印邸御成能番組 一通

横折懐紙一枚。片側に十五番の番組。下間少進が関寺小町を初

演した時の能で、正保三年までの年数書がある。別の片側にこの時の能に関する逸話を追記し、承応三年までの年数書がある。13と一緒にした包紙に慶応四年の豊成の付記。

15 宗与筆「観世大夫初り之事」 一通

懐紙大の楮紙一枚。観阿弥伝、室町將軍家御用の事、禁中出入の事、勅勘の事など。観世休齋老あて京主膳正（京極主膳正高通）書状（観世新九郎は療養に専念すべしとの内容）の紙背。

16 宗与筆、観世大夫初之事・観世大夫次第・金春大夫次第 一通

横折り厚葉大版斐紙一枚（紙背は宗孚・常春・玄昌らの百韻連歌の名残の折）。片面が観世大夫初之事で、15とは内容小異あり、猿楽由来説が主体。別面が両大夫の歴代の実名・法名等。末に「右近代之太夫名乘法名共氏勝子今春権兵衛ニ尋記之 観世正右衛門入道宗与（花押）」と奥書。

17 万治二年宗与筆「観世大夫次第・金春大夫次第」 一通

16の別面と同内容。末に「右今春大夫近代之名乗戒名共今春権兵衛ニ相尋記之也 万治二亥小春廿三日 観世休齋宗与（花押） 観世新九郎殿」と奥書。

18 寛永二十一年元信筆、覚書 一通

美濃紙二枚続き。末に「：ヤドヘカヘリソノマ、書之者也 寛永廿一極月六日夜四つ過 観正右衛門（花押）」とある。兄の新九郎豊勝宅で談合した事ども（忠之公よりの合力銀のこと、跡目を豊勝の子に譲ることなど）を詳細に記録した文書。豊勝が元信に疑心を抱いていたこと、元信を冷遇していたことが知られる。19・20と一包。

19 慶安三年元信筆「覚」 一通

懐紙一枚。江戸初参・家督相続、松平忠雄公合力のことなど、自己の履歴に関する覚書。題記の下に「慶安三三月十四日夜雨徒然之刻書之 閑事々々 正右衛門元信」とある。

20 寛文二年宗与筆「宗与母方ノ事」 一通

懐紙二枚続き。題記は冒頭の記事にのみかかるもので、自己の経歴に関する記事の方が量的には多く、相続の事情が詳しい。「寛文二」とら九月五日夜 宗与」と署名。18・19と一包で、その包紙に豊好が四通としているのは、20が二枚に離れたため。

21 元信筆「催花之額之事」 一通

羯鼓ヲ撃テ花催之事(明皇雜録抜書)・羯鼓由来(下学集抄写)、及び二一の催花額の写し(「華」字異なる)。美濃紙一枚。署名の類なし。

22 宗与筆、江隠和尚作沢庵加點「歌舞之濫觴」 一通

ほぼ間合紙大の斐紙一枚。観世宗家蔵の『歌舞濫觴』(大徳寺江隠宗頭が橘昌次編の『自家伝抄』系統の伝書に加えた跋文)に、沢庵が訓点・振仮名を加えた寛永壬午(十九年)七月廿一日付の文書の写し、宗与の考証加筆がある。

23 万治二年宗与筆「大和御祭之事・五調子之次第」 一通

宗与あての三通の書状(寺島太良兵衛・京極丹波守高国・神山源吉)をつないだ紙背。前半は若宮祭や薪猿楽の故実で、呪師払や年用の事も見える。後半は他書からの抜書で「右去所ニ花伝書写シト有中ノ抜書也 本花伝書ト同前カ可尋也 万治二亥十月三日 観世宗与 正本花伝書ニ右之義無之也」と識語があ

る。

24 宗与筆、鼓甲乙掛声陰陽説下書 一通

京極丹波守高国から観世休齋あて極月廿五日付書状(大鼓筒出来謝礼)の紙背から表(行間と片側空欄)にまで書込む。鼓の故実説で美濃権守書物からの抜書という記事もある。署名なし。下書の由を元信が端書に記す。

25 元信加筆、鼓之字解 一通

「小補韻会」なる書の抜書らしい「鼓」字の解。傍書加筆が元信の筆らしい。

一〇 故実・道具関係書付

——書付類その二——

- 1 寛永廿一年元貞筆『名物之簡之事・大鼓筒之名物之事』 一通
180×725の楮紙二枚をつなぎ、表に「名物之簡之事」(小鼓名筒の目録と解説)、裏に「大鼓筒之名物之事」を書き、末に「寛永二十一年甲申年五月下旬 元貞(花押)」と署名。観世彦三郎元貞は又次郎重次の孫で大鼓方。大小の筒の作者伝を含む。
 - 2 寛文二年結崎玄入筆「鼓之起・鼓ノヨミ声」 一通
美濃紙大の薄紙三枚をつなく。鼓に関する故実考証で、動と働、碎動と力動に関する説もある。末に「寛文二壬寅九月一日 結崎玄入老書タマワル」とあり、玄入(観世金十郎重治)筆らしい。
 - 3 江戸中期筆、土鼓・小鼓花形書付 一通
土鼓起原考証と花形の由緒。片仮名まじり。
 - 4 明和五年七月観世新九郎矩豊筆、鼓筒鑑定書 一通
祖父折居作という。「鼓筒之書付」と上書ある包み紙に、1・5・10と一包み。
 - 5 江戸後期筆、鼓筒目録 一通
二挺入鼓箱の分と一挺入の分に分けて十八個の筒の目録。新九郎家蔵の小鼓筒目録であろう。4等と一包み。
 - 6 文政九年四月七日筆山岸孫兵衛所持鼓筒に関する書付 一枚
- 遠州浜松天神町山岸孫兵衛所持の大小筒について。信長より拝領の由を記す箱書、五月廿一日付宝生権九郎豊重の極め(祖父折居作小鼓筒とする)を写す。裏面は文政十年の秋田半大夫所持の三挺の筒についての書付。4等と一包み。
- 7 豊紀筆、三人の折居に関する書付 一枚
コヲリイ・サカイヲリイ・イキモリツカヲリイの名と作の特色。「豊成云、右之書付ハ豊紀筆也 十一冊之本より抜書シタル者 トミヘタリ」と付記。4等と一包み。
 - 8 宮増弥左衛門と鼓筒作者に関する書付 一通
9 同右 一通
問合せへの返答。宮増が流祖である事と、作者の連名。9が草稿か控で粗紙。8は雲母引きの料紙。4等と一包み。
 - 10 慶応三年正月豊成筆「鼓筒作書」 一通
古折居以下、右作四名、古作分五名、新作之上九名、新作六名計24名の筒作者の名と年代。「或人右之本書ヲ持来為見候ニ付 咄シ之種ニも可為哉与写し置ぬ 右ハ大倉家ノ書物ノ由 慶応三卯年 正月月中旬 催花堂」と識語。包紙には「鼓筒作人書付一通」と上書。4等と一包み。
 - 11 豊成筆「狂言之大事・申楽翁之大事奥書」 一通
包紙上書に「大蔵家ニアリ」とあり、『古本能狂言集三』所収の正保二年五月卜部兼從筆の伝書の奥書の写し。
 - 12 慶応三年七月九日豊成筆「神代御系図抜書」 一通
天守受売命の系譜が主体で、後半は猿楽起原説の抜書。紙背端に「仁印 抜書物五ツノ内 豊成」とある。12・17の六点は一

包みで、包紙の上書に「三鼓之起原覚書」とあり、鼓の起原考証のための抜書資料集。包紙にも種々の考証記事がある。

13 豊成筆、聖徳太子略伝・秦河勝伝 一通

日本紀等の抜書。末に「右ハ鼓ノ起リ等ノ事を可レ記ト思依リテ先書シ置也」と識語。紙背端書「義印 抜書物五ツノ内 豊成」。12等と一包み。

14 豊成筆「三鼓起原之事」 一通

「抜書物五ツノ内」の礼印。「右之通宮増家伝来之書記より書抜観世新九郎豊成」と識語。12等と一包み。

15 元治元年四月豊成筆「鼓之事覚書」 一通

「抜書物五ツノ内」の智印。享保六年書上の抄写と、『高砂増々抄』から写した「猿楽原始等」。12等と一包み。

16 文久元年豊成筆、猿楽起原書付 一通

「抜書物五ツノ内」の信印。「右ハ先代旧事本紀より書出シタル者ナルベシ」と識語。12等と一包み。

17 豊成筆「三鼓起之事」 一通

「五ツノ外」と端書。12等と一包み。親賢伝来という「翁立伝受」の事。

18 豊成筆「猿楽三鼓起原」草稿 (10に同封) 一通

19 豊成筆、猿楽と能の関係についての問答 二通

問答体で猿楽と能の関係を説明しようとした草稿二種。内容相似し、ともに訂正加筆が多い。

20 豊成筆「六芸細釈」写し 一通

礼楽射御書数に関する注釈の抄写。「以上中村平五三近子述享

保十五年比ノ人也 京師ノ人」と識語がある。裏端書「六芸注釈唐子錦撰」。

21 豊成筆、鼓箱銘文書付 二枚

一枚は石川丈山銘文、一枚は前大徳万輝書の銘の分。

22 森見龍老筆、石川丈山小鼓銘写し 一枚

包紙付記「右ハ森見龍老手跡也 天保十三壬寅年九月 豊成」。

23 小鼓銘字句注解(22と一包み) 一枚

24 石川丈山作鼓箱銘文模写 二枚

一枚は文字は輪郭のみ。一枚は印なし。鼓箱の蓋の銘の由、包紙に言う。新九郎家の鼓箱の蓋裏に丈山銘があったらしい。

25 豊成筆「武江年表抜書」 一通

能段者及び能に関連ある記事のみ。

26 豊成筆、徒然草・兼好に関する書付 一通

27 七夕前夜にあやめ結う時に三遍唱える歌 一枚

28 豊和筆「小鼓物ニたとへ条」 一通

上下を朱で縁どりした料紙。「鼓は大竹のごとし」など、『音曲玉淵集』巻五の「物に誓への条々」を鼓に寄せて言い直した18ヶ条の短文。末に朱で「豊和」とある。包紙に豊成の付記があり、『音曲玉淵集』との関係を指摘する。